

中高年男性におけるサポート・ネットワークと「結びつき志向」役割との関係

——ジェンダー・ロールの視点から——

大和礼子

高齢者のサポート・ネットワークに関して、女性は配偶者・子ども・その他の親族・友人など広く多様なサポート・ネットワークを持つのに対して、男性は配偶者のみに頼る傾向があることが、従来から指摘されてきた。本稿の目的は、このようなサポート・ネットワークの広がりや差を規定する要因を明らかにすることである。まずはじめに、サポート・ネットワークのジェンダー差を生む要因についての諸説を検討し、その結果として、人と人との結びつきの形成自体に価値をおく「結びつき志向」の役割を遂行しているかどうかが重要な要因として考えられるという仮説を示す。次に、中高年男性に関するデータを分析し、その結果、仮説どおり、男性においても「結びつき志向」の役割を遂行していることにより、サポート・ネットワークが配偶者以外に広がる可能性が高まることを明らかにする。最後に、サポート・ネットワークの考察のためには、ライフ・ステージを通じた分析が必要であること、行動次元の視点を導入する必要があること、および、「サポートを受ける」という行為を、「無力な」行為ではなく、他者との結びつきをつくるという「能力や熟練が必要な」行為としてとらえる必要があること、の3点について議論を行う。

キーワード：サポート・ネットワーク、ジェンダー・ロール、「結びつき志向」の役割

1 はじめに

高齢者のサポート・ネットワーク（以下、SN と略す）¹⁾に関する研究において、男性と女性ではSNのあり方が異なるということが以前から注目されてきた。すなわち、高齢期において精神的・身体的援助が必要なおり、男性は配偶者のみに頼る傾向があるのに対し、女性はその他に子ども、他の親族、友人などにも頼る傾向があるというのである。

男性のSNはなぜこのように配偶者に限定される傾向があるのだろうか。近年、ジェンダーに関する研究の発展により、SNの性差も生物学的性差に由来するものではなく、社会・文化的な環境によって後天的に形成されるものだと考えられるようになった。したがって生物学的には同じ男性でも、その人のおかれた環境や日常生活のあり方によって、「配偶者しか頼れない」と考える人と「配偶者以外にも頼

れる」と考える人に分けられると考えられる。どのような要因がこの2つのタイプを分けるのだろうか。

そこで本稿では、

(1) 男性のSNが配偶者に限定されがちになる要因について理論的に検討し、その結果、「結びつき志向」の役割を遂行しているか否かが重要な要因であることを指摘する。

(2) 男性の中で、「結びつき志向」の役割を遂行しているか否かによってSNのあり方が異なるのかについて、データ分析を行う。

最後に、高齢者のサポートに関して、本研究から示唆される問題について議論を行う。

2 サポート・ネットワークにおける男女差についての研究状況

1) 高齢者のサポート・ネットワークにおける男女差の存在

タウンゼント(1974)は、イギリスの労働者階級の家族において、子ども・孫・近隣の人々をも含む相互援助網の中心に位置するのは、父親ではなく母親であることを明らかにした。それ以後に行われた研究においても、男性と女性ではSNのあり方が異なるということが繰り返し報告されている。このテーマに関する詳細なレビューによると、男性のSNは配偶者のみに偏る傾向があるのに対し、女性のそれは配偶者の他に子ども、他の親族、友人などにも広がっていると報告されている(Antonucci, 1985 a)(Chapman, 1989)。そしてこのような男女差は、日本においても同様に見られる(Antonucci, 1990)²⁾。

配偶者間での相互援助は義務的關係である。男性においては、援助を求める範囲はこの義務的關係の内部にとどまっている。それに対し女性においては、義務的關係を越えて他の親族や友人にまでも広がっている。このような男女差を生む要因とは何なのだろうか。

2) サポート・ネットワークとジェンダー・ロール

欧米では、SNのジェンダー差を生む要因を明らかにしようとする研究が、1980年代の半ば以降、数多く行われるようになった。それらによると、SNのジェンダー差は、生物学的性差の結果生じるのではなく、社会・文化的な性役割(ジェンダー・ロール)の影響により生じる。さらに、ジェンダー・ロールには多様な側面があり、社会構造上の役割(職業役割か家庭役割か等々)の他に、対面的相互作用場面におけるジェンダー・ロール(いわゆる「男らしさ/女らしさ」)についても、研究が行われている。

それに対して日本では、SNのジェンダー差は多くの研究で報告されているが、なぜそのような差が生じるのかを中心的なテーマにすえた研究はわずかしか見られない³⁾。それらの研究においても、研究者の関心は、人口学的要因(配偶関係や家族構成など)あるいは社会・経済的要因(社会・経済階層など)に集中しており、

ジェンダー・ロール、とりわけ対面的相互作用場面におけるそれに注意を払ったものはほとんどない。

本稿では、欧米での研究をもとに、ジェンダー・ロールのどの側面がどのようなメカニズムでSNに影響を及ぼすのかについての議論を、次の4つに整理する⁴⁾。

① 社会構造上の地位に対応した役割としてのジェンダー・ロール

(a) 役割が遂行されている領域に注目する立場

(b) 当該役割によってどのような人間関係を形成する機会が与えられるか、に注目する立場

② 対面的相互作用場面における役割としてのジェンダー・ロール

(c) 女性的な相互作用パターン＝「依存」ととらえる立場

(d) 女性的な相互作用パターン＝「相互依存」ととらえる立場

以下では、それぞれについて詳しく検討しよう。

① 社会構造上の地位に対応した役割としてのジェンダー・ロール

人が社会構造においてどのような地位と役割を割り当てられるかは、その人の性によって大きく左右される。近代社会においては女性はおもに家庭役割を、男性はおもに家庭外の役割を割り当てられてきた。そして、人がどのような役割を遂行しているかが、その人がSNを築く機会に影響し、その結果としてSNのあり方そのものに影響を与える。以上が①の考え方であるが、①はさらに(a)と(b)の2つの立場に分けることができる。

(a)は、役割が遂行される領域に注目する。この立場によると、女性に割り当てられた家庭役割は家庭内で遂行されるので、SNが家庭の外へ広がりにくい、男性は家庭外での役割を割り当てられているので、SNは外へ広がりやすい(Dykstra, 1990)⁵⁾。

確かに、友人・知人の数などを指標にした一般的なネットワークにおいては、しばしば女性より男性の方がその規模が大きいことが報告されている(Booth, 1972)(Powers and Bultena, 1976)。しかし、他者から援助を受けるというSNにおいては、まったく逆の傾向——すなわち男性より女性の方が、より広く家庭を越えた結びつきをもつという傾向——がみられる。したがってSNの男女差に関しては、この説明はあてはまらない。

(b)は、当該役割によってどのような人間関係を形成する機会が与えられるのかに注目する。Vaux(1985)は人間関係を「課題中心志向」と「個人的関係志向」に区分している。前者は課題そのものに、後者は人との関係そのものに照準を合わせるような関係のあり方である。しかしながら日本社会における人間関係を分析する場合には、次の2点に注意する必要がある。1つは、日本社会ではあらゆる場面で、課題それ自体より人と人との関係が重視される傾向があり(浜口, 1977)、職場においてさえそうである(隅谷, 1984)。したがって「課題中心志向」のような関係のあり方は、相対的に孤立した状況において現れる。2つめとして、上野ほか

(1988) は、現代日本の組織やネットワークにおける人間関係にはすなわち、序列や肩書きにもとづく関係を強調するものと、序列はできるだけ曖昧にして人と人との結びつき自体を強調するものの2つが存在することを明らかにしている。人との関係を重視するものの中にもこの2つが存在するのであり、前者は「序列志向」、後者は「結びつき志向」と名づけることができよう。以上より本稿では、人間関係のあり方を「課題中心志向／序列志向／結びつき志向」の3つに分ける。「課題中心志向」は人間関係自体には価値をおかず、あえていえば個人の自立に価値をおく。「序列志向」は序列にもとづく人間関係と、その中でより上位の位置をとることに価値をおく。これら2つの関係のあり方は、SN（他者から援助を受ける関係）の形成とは相容れない。それに対して「結びつき志向」は、他者との結びつき自体に価値をおくため、SNの形成を促進する。

以上の道具立てを用いて、まず、男性の役割とされる家庭外での役割について検討しよう。現代における家庭外での役割として主なものは、職場での役割と地域社会での役割であろう。現代日本の職場組織では、「序列志向」の人間関係が求められる。それに対して地域社会での活動、特に現代の被雇用者化した男性が地域社会で行うような活動——すなわち、近隣の人とのつきあい、地域行事への参加、スポーツ・趣味の会への参加など——では、人と人との結びつき自体に価値を置く「結びつき志向」の関係が求められる。以上より、職場組織に参加しそこでの役割を遂行することは、SNの形成とは相容れない。一方、地域社会での活動を行うことは、SNの形成を促進すると考えられる。そして多くの男性は、高齢になって職を退く前は職場での役割に力を注ぐことを求められ、退職後は地域や家庭での役割を求められるのである。

次に、女性の役割とされる家庭役割について検討しよう。パーソンズとベールズ(1981)によると、家庭役割とは「表出的役割」とされる。すなわち、他者の感情のコントロールを手伝い、人間関係を調整する役割である。これに対してオークレー(1980)は、主婦に対する聞き取り調査を通じて、家事には2つの活動が含まれることを明らかにした。第1はパーソンズらのような人間関係を調整する活動である。第2は掃除・洗濯・食事の用意と後かたづけといった活動であり、これは人との関係からは疎外され、モノとの関係が中心となるような性質を持つ。オークレーによると、後者のモノ対象の家事を行うにあたって主婦たちは、毎日すべき「おきまり仕事」や「達成の基準」を自分自身で設定し、それを「仕事」として日々やり遂げることによって達成感や自信といった自己報酬を得ている。また天木(1993)は、家事の中には家庭(およびそれに属する人々)と専門的制度体(およびそれに属する人々)を連絡し、両者の関係を調整する活動(たとえば、子どもを幼稚園に連れていき、保母との連絡調整をすること)も含まれることを明らかにした。自分の属する家族と他の家族の関係を調整すること(たとえば、親戚づきあいや近所づきあい)も、このような家事に含まれよう。

以上の検討から、家事あるいは家庭役割には、2つの活動が含まれることが示唆

される。1 つめは掃除・洗濯・料理など直接的にはモノを対象にする行為であり、道具的家事とも呼べるものである。道具的家事においては、「課題中心志向」の関係が主に形成される。2 つめは家庭の内・外で人間関係を調整する行為であり、表出的家事とも呼べるものである。表出的家事においては「結びつき志向」の関係が形成される。さらに、家事におけるこの2つの活動は、いつも同時に遂行されるわけではなく、一方の遂行が他方の遂行を妨げるといことがしばしば起こる。たとえばあるカウンセラーは、掃除・洗濯を完璧にこなそうとする親は、子どもの感情を理解したり支えたりする時間や心理的余裕を失いがちであることを指摘している(三上, 1994)。以上より、道具的家事の役割を担うことは、SNの形成を阻害し、表出的家事の役割を担うことは、SNの形成を促進すると考えられる。

今までの考察から、(b)の立場によると、SNの男女差がなぜ生じるのかについては次のように解釈できる。男性は、職を退くまでは、家庭外の役割の中でも職場での役割を中心に担っているため、SNを形成しにくい。それに対して女性は家庭内の役割として道具的家事のみならず表出的家事をも担っているため、SNを形成しやすい。

② 対面的相互作用場面における役割としてのジェンダー・ロール

次に対面的相互作用におけるジェンダー・ロールについて検討しよう。SN、とりわけ本稿で問題にしているようなインフォーマルなそれは、対面的相互作用を通じて形成・維持される。対面的相互作用のあり方は、ジェンダー・ロール、すなわちいわゆる「女らしさ／男らしさ」と深く関係している。

対面的相互作用の代表的なものは会話である。会話におけるジェンダー・ロールについては、多くの研究が蓄積されている。それをコーツ(1990)は以下のようにまとめている。男女混合の会話では、相手の話を途中で遮るのは女性より男性に多く見られ、これによって男性は会話の話題を支配する。女性は最小の反応(いわゆる「あいづち」)を男性より多く用いて話し手に対する支持を表す。さらに女性の方が疑問形式の文を多用して、相手が話す機会をつくり会話を維持する役割を担う。男性の方がののしり表現や命令形を多く用いるのに対し、女性の方は丁寧さと結びついた言語表現を多用する。

このような差が何を表すのかについては、2つの立場がある。

(c)は上記のような「女らしい」相互作用パターンを「無力さ」や「依存性」と解釈する立場である(O'Barr and Atkins, 1980)。この解釈によると、SNの性差は以下のように説明される。すなわち女性は、自分自身の「無力さ」や「依存性」を表象するような相互作用パターンを、男性は自分自身の「強さ」や「独立性」を表象するような相互作用パターンをとるよう社会化されている。人からサポートを受けることは「無力さ」や「依存性」を表すが、女性はそれが「女らしい」ことであるゆえ、自己イメージが傷つくことはない。一方男性にとっては、同じことが「男らしさ」という自己イメージを傷つけることになる(野口, 1991)。ゆえに男性

はSNを義務的關係に限定する傾向があるのである。

ところが、女性はサポートを受けることも多いが、それと同時に与えることも多いことが報告されている (Antonucci, 1985 b) (Antonucci and Akiyama, 1987 : 744) (笹谷, 1994 : 126)。「女らしさ」を「無力さ」や「依存性」と解釈することは、女性が男性より多くサポートを与えているという事実と矛盾するのではないだろうか。

(d)は、「女らしさ／男らしさ」について(c)とは異なった解釈をする。Burda, Vaux and Schill (1984)は、女性のジェンダー・ロールを「表出的・暖かさ・支持的・養育的・共感的」、男性のそれを「道具的・独立の強調・競争的・主張的・合理性」ととらえ、女性のそれの方が対面的状況において他者と関係を築くのに有利としている。同様にDykstra (1990)は、上記のような女性的特質をSNを形成するための「資源 (resources)」あるいは「熟練 (skill)」としてとらえており、またAntonucci (1985 b)は「能力 (competence)」をとらえている。なぜこのようなジェンダー・ロールの差が生じるのだろうか。ギリガン (1986)によると、女性は人間関係において「結びつき」や「相互依存」を重視する価値観を発達させるのに対し、男性は「独立」の達成とその上での「競争」を重視するような価値観を発達させると述べている。このようにあるべき人間関係のイメージが男女で異なるために、相互作用のパターンも男女で異なっているのである (タネン, 1992)。すなわちこれらの論者によれば、女性的な相互作用パターンは「依存」ではなく「相互依存」「相互援助」であり、「結びつき志向」のものである。したがって、このような相互作用はSNの形成を促進する。それに対して男性的な相互作用パターンは、「独立」と「競争」を志向するあまり「孤立」に落ちいりやすい。そのためSNを形成しにくい。

ところで女性はなぜ「結びつき志向」の相互作用パターンをとるのだろうか。それは女性が、家庭役割を担う存在として、人間関係を形成・調整するという役割を遂行すべく社会化された結果と考えられる。より正確にいうなら、過剰に社会化された結果である。すなわち、もともと家庭役割という特定の文脈において行うべき人間関係調整役割を、家庭役割とは別の文脈、より一般的な文脈においても、同様に行うこと、それが対面的相互作用における「女らしさ」なのである。

以上から、SNのジェンダー差を生む要因に関する仮説として、(b)と(d)の立場がより妥当なものであることが示された。さらに対面的相互作用における「女らしさ」について上記のように考えるならば、SNのジェンダー差について、(b)と(d)はほぼ同じ立場であるといえる。すなわち女性は家庭役割として、人間関係を形成・調整する役割を割り当てられ、そのように社会化され、実際にその役割を遂行し続けることによって、「結びつき志向」の関係や相互作用パターンを発達させる。その結果として、義務的關係を越えたより広いSNを形成しているのである。

3 データ分析の目的

以上の検討から、SNの形成に影響を及ぼす要因として、「結びつき志向」の関係や相互作用を発達させるような役割（以下、「『結びつき志向』の役割」と略す）を遂行することが重要であることがわかった。そうであるならば、男女に関わらず、この役割を日常的に行っている人は、行っていない人に比べて、SNが広いといえるのではないだろうか。

以下の分析では、中高年期の男性に注目して、「結びつき志向」の役割を行っている程度とSNの広がりとの関係を明らかにしたい⁶⁾。

本稿で男性のみを対象とする理由は、第1に女性のケース数の不足である。本稿の調査においては、後に示すように調査対象が大企業の中高年労働組合員（正規従業員）であるため、分析対象となるケースが女性では44ケースしかなく、女性についての分析は断念せざるを得なかった⁷⁾。第2は理論的な理由である。すなわち既存の知見は、男性のSNは配偶者に偏るとして、男性を一枚岩的なものとしてとらえた上で問題視する傾向にあった。それに対して、男性の中にも様々なタイプのSNが存在することと、そのような多様性の生まれる要因を明らかにすることは、SN研究の発展にとって意味のあることと思われる。

また中高年期に注目するのは、高齢期のSNは高齢期になって突然形成されるのではなく、中高年期にすでに準備されていると考えるからである。すなわち、「結びつき志向」の役割遂行がSNを形成するならば、その遂行の程度に応じて、中高年期においてすでに、SNが広い人とそうでない人の分化が生じていると考えられる。ただし中高年期にはサポートがあまり必要とされないため、その分化は顕在化していない。サポートが必要な高齢期になって、顕在化するのである。したがって高齢期のSNがなぜそうなのかを理解するためには、中高年期のそれを研究する必要があるのである。にもかかわらず、これまで日本では、中高年期の男性を対象としたSNの研究はほとんど行われていない。

4 調査の概要および分析対象の基本属性

本稿の調査は、1995年3月中旬～下旬に、大企業X社（製造業）の労働組合の組合員のうち、45歳～59歳の男女を対象にして行われた。調査票の配布と回収は、労働組合の各支部（関東地方～中国地方にある9支部）を通じて手渡し方法で行われた。配布数は2321、回収数は1992（男性：1875、女性：115）で、回収率は85.8%であった。

本稿の分析対象は、男性で、「子どもがすべて学校を卒業した」というライフステージに属する人である。分析の都合上、配偶者、子ども、別居親族について「いない」と答えた人は分析対象からはずした。

分析対象となった人々の基本属性は、[表1]に示した。大企業の中高年労働組合員という対象の特性上、ある限定された社会・経済的属性をもつ人々が対象と

[表1] 分析対象者の基本属性

〈年齢〉		〈勤務形態〉		〈最終学歴〉		〈年収〉	
45～49歳	16.5%(103)	日勤	52.0%(325)	中学	59.8%(374)	～499万円	9.0%(53)
50～54歳	41.1 (257)	2交替	42.7 (267)	高校	36.3 (227)	500～599万円	22.9 (134)
55～59歳	42.5 (266)	3交替	5.3 (33)	短大・高専	1.4 (9)	600～699万円	28.8 (169)
				大学	1.4 (9)	700～799万円	30.7 (180)
				その他	1.0 (6)	800万円～	8.5 (50)

なっている。渡辺（1991）によると、日本において、労働者の生活のすべてが企業中心に構造化されるような「企業社会」は、高度成長期においてまず民間大企業の中で成立し、それが他にも及んでいったとされる。SNについても、大企業退職者のそれは狭い範囲に限定される傾向にあることが報告されている（玉野，1990）。したがって本稿の対象者は、高齢期になって、「企業社会」の中で形成された生活の影響が最も現れやすく、本稿の関心である「配偶者に偏りがちなSN」という問題がもっとも生じやすい人々であると考えられる。したがって、これらの人々について研究することは意義あることと思われる。ただし今後、他の属性をもつ人々についても検証していく必要があることはいうまでもない。

5 分 析

本稿の理論的検討において、家庭外の役割としては①職場の一員としての役割と②地域の一員としての役割、家庭内の役割としては③道具的家事と④表出的家事がそれぞれ区別され、これらのうち②地域の一員としての役割と④表出的家事が「結びつき志向」の役割であることが示唆された。そこでまず分析1で、男性においても家庭役割には③道具的家事と④表出的家事の2つの次元が別のものとして区別されるのかについて検証する。次に分析2で、①～④の役割のうち②地域の一員としての役割と④表出的家事が「結びつき志向」の役割であるといえるのかについて検証する。最後に分析3で、①～④の役割遂行がSNの広がりによりにどのように影響するのかについて分析を行う。

分析1) 家庭役割の2つの次元

まず、男性においても家庭役割には2つの次元が存在するのかについて検証する。家庭役割に関する[表2]のような質問項目に対して、主成分法による因子分析を行った。固有値1以上の基準で2因子が抽出され、バリマックス回転を行った結果が[表2]である。

第1因子は「食事の後かたづけ」「掃除」「洗濯」など道具的家事の遂行に関する項目と相関が高い。一方第2因子は、家族成員の感情コントロールの援助、家族関係の形成、家族成員に対する関心などを表す項目と相関が高い。したがって第1因

[表2] 家庭役割の因子負荷行列 (バリマックス回転後) N = 626

	第1因子	第2因子	共通性	平均値	標準偏差
・食後の後かたづけをする	.74	.10	.56	.36	.48
・洗濯機を使うことがある	.73	.05	.54	.41	.49
・電気掃除機を持って掃除をすることがある	.72	.15	.54	.65	.48
・一人で食料品などの買物に行く	.67	.06	.45	.50	.50
・妻が落ち込んでいる時は、相手が納得するまでじっくり話を聞く	.05	.80	.64	.52	.50
・妻と話をする時は、自分の方から相手が関心を持ちそうな話題を提供する	.05	.74	.55	.47	.50
・子どもの友達の名前を3人以上知っている	.12	.55	.31	.56	.50
・夕食を週3回以上、家族とともにする	.06	.41	.17	.77	.42
固有値	2.07	1.69	計	3.76	
寄与率 (%)	.29	.18	計	.47	

※「あてはまる」=1、「あてはまらない」=0

子は「道具的家事の遂行」を規定する因子であり、第2因子は「表出的家事の遂行」を規定する因子である。因子分析の結果から、男性の家庭役割においても、相互に独立した2つの因子にそれぞれ規定された「道具的家事」と「表出的家事」の2次元があることが明らかになった。

分析2) 4つの役割遂行と「結びつき志向」との関係

次に、①職場の一員としての役割遂行、②地域の一員としての役割遂行、③道具的家事の遂行、④表出的家事の遂行のうち、②と④が「結びつき志向」といえるのかについて検証する。それぞれを示す指標としては、次のような項目を用いた。

- ① **職場役割**：「職場の人や仕事上のつきあい（酒を飲む、食事をする、遊びに行く）」の程度について、「めったにない=1、月1~2回程度=2、週1~2回程度=3、週3回以上=4」を与えた。（対象者には役職や労働時間の差はあまりないと考えられるため、労働時間以外にどれだけ職場関連の人間関係に身を置いているかに注目した。）
- ② **地域役割**：「隣近所の人とのつきあい」「地域の行事への参加」「町内会・自治会の役員」「スポーツ・趣味の会への参加」のそれぞれについて、「積極的にやっている=4、まあ積極的にやっている=3、しかたなくやっている=2、まったくやっていない=1」を与え、4項目の得点を合計した。
- ③ **道具的家事**：[表2]の第1因子の因子得点。
- ④ **表出的家事**：[表2]の第2因子の因子得点。
- ⑤ **結びつき志向**：「人に対しては、誠実であるよう心がけている」「他人の気持ちになることができる」「周りとの調和を重んじている」「人との結びつきを大切にして生きている」のそれぞれについて、「あてはまる=5、どちらかといえ

ばあてはまる=4, どちらでもない=3, どちらかといえばあてはまらない=2, あてはまらない=1)を与え, 4項目の得点を合計した。(「結びつき志向」をはかる項目は, 伊藤(1993)による「社会志向性尺度」の指標を参考に作成した。)

[表3]

(**=p<0.01 * =p<0.05)

	①職場役割	②地域役割	③道具的家事	④表出的家事
⑤結びつき志向	.03	.13**	.06	.26**

「⑤結びつき志向」と①~④の指標の相関係数を示したのが[表3]である。「⑤結びつき志向」との有意な相関という点からみて, ②地域役割と④表出的家事の遂行は「結びつき志向」であり, ①職場役割と③道具的家事の遂行はそうではないといえよう。

分析3) サポート・ネットワークの規定要因

最後に, 今まで見てきた4つの役割遂行が, SNの広がりによどの程度影響するかを見てみよう。SNを測定する項目としては, 「配偶者/別居の親族/近所の人/友人」のそれぞれが, 「あなたが病気で寝込んだ時, 家事や看病をしてくれることについてどの程度期待できるか」を問う項目を用いた⁸⁾。

この項目によってSNを[表4]のように4タイプに分類し, それぞれの構成比率を示した。本稿の目的は, 病気の時の家事や看病を配偶者にしか頼れない「配偶者限定型」か, 配偶者以外にも頼れる「拡大型」かを分ける要因を明らかにすることなので, 「孤立型」と「非配偶者型」は以下の分析から除いた。

[表4]

	孤立型	非配偶者型	配偶者限定型	拡大型
配偶者	×	×	○	○
別居の親族	×	} 3つの内 1つ以上 に、○	×	} 3つの内 1つ以上 に、○
近所の人	×		×	
友人	×		×	
構成比率	6.2%(37)	3.7%(22)	32.6%(195)	67.6(345)

※「(どちらかといえば)期待できる」=○、「(どちらかといえば)期待できない」=×

まずはじめに, ①職場役割, ②地域役割, ③道具的家事, ④表出的家事の遂行のそれぞれが, 「配偶者限定型」と「拡大型」では異なるのかどうかを, 平均値の

差の検定によって確認した。紙幅の都合でデータは掲載しないが、「拡大型」の人は「配偶者限定型」の人に比べて、②地域役割と④表出的役割においてその遂行を表す点数が有意(1%水準)に高い。すなわち「拡大型」の人は「配偶者限定型」の人に比べて「結びつき志向」の役割をよく遂行していると考えられる。①職場役割と③道具的家事の遂行(ともに「結びつき志向」ではない)においては、「拡大型」と「配偶者限定型」で有意な差はなかった。

以上の分析は2変数間の関係のみを見たものであったが、次に、他の変数の影響をコントロールすることにより、①～④のそれぞれの役割遂行が単独にSNのタイプに及ぼす影響を見よう。そのために、4つの役割遂行とその他の属性変数を独立変数とし、SNが「配偶者限定型」か「拡大型」かを従属変数として、ロジスティック回帰分析を行った。「拡大型」が起こる確率に対する独立変数それぞれの影響を見るよう、モデル化した。用いた変数は次のとおりである。

- SNのタイプ:「拡大型」=0,「配偶者限定型」=1
 - 年齢:45歳～59歳まで,1歳刻み
 - 教育年数:最終学歴が中学=9,高校・専門学校=12,短大・高専=14,大学=16
 - 収入:なし=0,～50万円未満=25,～100万円未満=75,～200万円未満=150(以下同様に100万円刻みで1400～1500万円未満まで),1500万円以上=該当者なし
 - 勤務形態:日勤=1,2交替勤務=2,3交替勤務=3
 - ①職場役割,②地域役割,③道具的家事,④表出的家事:[表3]と同じ
- [表5]は、独立変数の平均・標準偏差とロジスティック回帰分析の結果である。

[表5] (**) = p<0.01 * = p<0.05)

	平均値	標準偏差	ロジスティック 回帰係数	標準化ロジス ティック回帰係数
年齢	53.4	3.7	-.04	-.08
教育年数	10.27	1.67	-.01	-.10
収入	656.6	115.5	.00	.06
勤務形態	1.53	.60	-.01	-.00
①職場役割	1.49	.67	.13	.05
②地域役割	9.80	2.92	.13**	.21**
③道具的家事	0	1.00	-.07	-.04
④表出的家事	0	1.00	.29**	.16**
定数項			1.83	

(-2 LOG L=38.18** SOMERS' D=.335 C=.668)

平均値の差の検定から予想されたとおり、「拡大型」のSNという事象が起こる確率に有意な影響を持つのは、②地域役割の遂行と④表出的家事の遂行であった。①職場役割の遂行と③道具的家事の遂行、およびその他の属性変数は、有意な影響を及ぼさなかった。以上より、②地域役割や④表出的家事などの「結びつき志向」の役割を遂行することは、SNが配偶者以外の人へも拡大する可能性を高めると考えられる。それに対して「結びつき志向」でない①職場役割や③道具的家事の遂行は、SNの広がりに影響を及ぼさない。

6 議 論

議論1：ライフ・ステージとサポート・ネットワーク

本稿の分析では、男性の中高年期において既に、SNが配偶者に限定される人とそうでない人の分化が見られた。この分化は中高年期には潜在化しているが、サポートの必要が高まる高齢期には顕在化するのではないだろうか。すなわち高齢期のSN、少なくともその当初のSNは、それ以前の生活のあり方によって準備されると考えられるのではないだろうか。

議論2：行動にもとづくカテゴリーの導入

SNの性差に関する従来の研究は、「男／女」のカテゴリーに注目してきた。それに対して本稿では、SNのあり方を決定する上で、『結びつき志向』の役割を遂行している／していない」というカテゴリーが重要であることが示唆された。職場役割や「男らしさ」とは相いれない「結びつき志向」の役割を遂行することが、SNを広げるのである。このような日常の行動にもとづくカテゴリーを導入することによって、男性（あるいは女性）の中でのSNの多様性や、SNの変化の可能性について検討する道が開けるのではないだろうか。

議論3：「サポートを受ける」ことの意味——「無力」な行為 vs. 「能力ある」行為

従来「サポートを受ける」ということは「受動的」な行為であり、「無力さ」や「依存性」を表すものととらえられる傾向があった。高齢者の研究においても、高齢者を「受動的」「依存的」な存在とステレオタイプにとらえることが多かった（樽川，1984）。そのようなステレオタイプに対して、高齢者を「主体的」な存在としてとらえるよう、視点の転換の必要性が主張されてもいる（副田，1978b）。しかし、高齢者の「主体性」の表象と考えられているのは、労働・学習・社会参加（副田，1978a）であったり地域や家族・親族への貢献（樽川，1984）（杉井ほか，1992）などであり、そこには相変わらず、「サポートを受ける」ということ自体は「受動的」で「無力」な行為であるという図式が潜んでいる。

しかし本稿の分析が示唆したことは、義務的關係以外からサポートを受けられると認識するためには、相互の「独立」より「結びつき」に価値をおくような関係を形成していることが必要であり、そのような関係を形成できるだけの熟練や能力がサポートを受ける人自身に備わっていることが必要だということである⁹⁾。すなわち「サポートを受ける」ということを「無力な」行為ではなく、「結びつき」を形

成することのできる「能力ある」行為としてとらえる必要があるのである。

高齢社会を迎えて、配偶者外・親族外からのケアを社会に定着させていくことが求められている。その際、制度の整備と同時に制度を担う人間の「人間的な基盤」(フロム, 1951: 231)への洞察も不可欠である。「サポートを受ける」ことを「能力ある」行為として把握し、その発達を促進あるいは阻害する要因について明らかにすることが必要ではないだろうか。

7 おわりに

本稿では、「結びつき志向」の役割遂行という側面に焦点を当てて、中高年男性のSNの形成要因を考察した。ただしSNの形成要因としては、社会・経済・人口学的要因も重要である。今後はこれらの要因をも含めた分析を行っていく必要がある。

また本稿のデータは、一般に調査が難しいとされる中高年男性に関するデータとして貴重ではあるが、先に述べたように代表性に乏しいものであることも否めない。本稿の結果を一つの仮説として、今後、他の社会・経済的属性を持つ人々に関するデータ、あるいはより代表性のあるデータで検証していくことが必要不可欠である。

[注]

- 1) 「サポート・ネットワーク」に類する用語として、「ソーシャル・サポート」や「ソーシャル・ネットワーク」がある。「ソーシャル・サポート」はサポートが人々の幸福や福祉に及ぼす機能に注目する概念であり、「ソーシャル・ネットワーク」は人間関係の構造に注目する概念である。本稿では人間関係の構造のうち援助という側面に焦点を当てることから、「サポート・ネットワーク」という用語を用いた。以上の議論については、稲葉・浦・南(1987)、野口(1991)を参照。
- 2) SNの男女差を報告したその他の研究として、Antonucci(1985b)、Antonucci and Akiyama(1987)、Antonucci(1990)、玉野ほか(1989)、笹谷(1994)などがある。
- 3) このような研究の少ない例として、玉野(1990)がある。
- 4) この分類においてはVaux(1985)、Dykstra(1990)、Huyck(1990)を参考にした。①の「社会構造上の地位に対応する役割」とは、パーソンズが用いた役割の概念に相当する。②の「対面的相互作用場面における役割」とは、エスノメソドロジーの立場に立つ人々が注目した役割に相当する。4タイプの議論のうち、Vaux(1985)の議論は(b)と(d)、Dykstra(1990)の議論は(a)と(d)、Huyck(1990)は①と②に該当する。また(c)に該当する議論として野口(1991)がある。
- 5) Dykstra(1990)は、家庭役割を「子どもの養育役割」として、この役割を遂行した経験のある人は、非親族におけるSNが少ないという分析結果を報告している。しかし、「子どもの養育役割」の指標化は、「子どものいる女性およびシングル・ファーザー」には1点、「子どものいない女性およびシングル・ファーザーではない男性」には0点を与えるという方法で行っているため、この指標は対象者の実際の養育経験を反映してはいない。したがって、この分析結果は信頼性に問題がある。
- 6) 先行研究として、須田(1986)は、大都市の男子ひとり暮らし老人の調査において、非親族からの日常的援助ネットワークがある人は、ない人と比べて、近所の人との関係を育てるべく

より積極的に働きかけている（たとえば、自分からあいさつをする、つけ届けをするなど）という事実を報告している。

- 7) この44ケースの中で、「病気で寝込んだ時、家事や看病について配偶者に期待できない」と答えた人が33%いた（男性では10%）。男性の問題が「配偶者以外にも頼れるか」であるのに対して、女性の問題は「配偶者に頼れるか」であることをうかがわせる。
- 8) したがってこれは、サポートの諸次元のうち「知覚されたサポート」（稲葉・浦・南, 1987）、あるいは「予期されたサポート」（野口, 1990）を測定したことになる。
- 9) このような議論については、Troll and Turner (1979) を参照。

〔参考文献〕

- 天木志保美(1993)「ケアラーとしての主婦」『家族社会学研究』第5号, 日本家族社会学会: 75-85.
- Antonucci, T.C. (1985 a). Social Support: Theoretical Advances, Recent Findings and Pressing Issues. in Sarason, I.G. and Sarason, B.R. (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers: 21-37.
- Antonucci, T.C. (1985 b). Personal Characteristics, Social Support and Social Behavior. in Binstock, R.H. and Shanas, E. (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences (2nd ed.)*. Van Nostrand Reinhold Co.: 94-128.
- Antonucci, T.C. and Akiyama, H. (1987). An Examination of Sex Differences in Social Support among Older Men and Women. *Sex Roles*, Vol. 17: 737-749.
- Antonucci, T.C. (1990). Social Supports and Social Relationship. in Binstock, R.H. and George, L.K. (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences (3rd ed.)*. Academic Press: 205-226.
- Booth, A. (1972). Sex and Social Participation. *American Sociological Review*, Vol. 37: 183-192.
- Burda, P.C.Jr., Vaux, A. and Schill.T. (1984). Social Support Resources: Variation Across Sex and Sex Role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol. 10, No. 1: 119-126.
- Chapman, J.N. (1989). Gender, Marital Status and Childlessness of Older Persons and the Availability of Informal Assistance. in Peterson, M.D. and White, D.L. (eds), *Health Care for the Elderly: An Information Source Book*. Newbury Park, CA, Sage: 277-328.
- コーツ, J. (1990), 吉田正治 (訳) 『女と男とことば——女性語の社会言語学的研究法』研究社出版。
- Dykstra, P.A. (1990). Disentangling Direct and Indirect Gender Effects on the Supportive Network. in Knipscheer, C.P.M. and Antonucci, T.C. (eds.), *Social Network Research: Methodological Questions and Substantive Issues*. Amsterdam, Swets and Zeitlinger: 55-65.
- フロム, E. (1951), 日高六郎 (訳) 『自由からの逃走』東京創元社。
- ギリガン, C. (1986), 岩男寿美子 (監訳), 生田久美子・並木美智子 (共訳) 『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店。
- 浜口忠俊 (1977) 『「日本らしさ」の再発見』日本経済新聞社。
- Huyck, M.H. (1990). Gender Differences in Aging. in Birren, J.E. and Schaie, K.W. (eds.) *Handbook of Psychology of Aging (3rd ed.)*. Academic Press: 124-132.
- 稲葉昭英・浦 光博・南 隆男 (1987) 『「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題』『哲学』第85集, 三田哲学会: 109-149.
- 伊藤美奈子 (1993) 「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』第64巻第2号: 115-122.

- 三上直子 (1994) 「家事と育児は反比例」, 菅野泰蔵 (編) 『こころの日曜日』法研: 118-119.
- 野口裕二 (1991) 「高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定」 『社会老年学』 No. 34: 37-48.
- オークレー, A. (1980), 佐藤和枝・渡辺潤 (訳) 『家事の社会学』松籟社。
- O'Barr, W. and Atkins, B. (1980). "Women's Language" or "Powerless Language"? in MaConnell-Ginet et al. (eds.), *Women and Language in Literature and Society*. New York, Praeger: 93-110.
- パーソンズ, T.・ベールズ, R.F. (1981), 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明 (訳) 『家族』黎明書房。
- Powers, E.A. and Bultena, G.L. (1976). Sex Differences in Intimate Friendship of Old Age. *Journal of Marriage and the Family*, vol. 38, No. 4: 739-747.
- 笹谷春美 1994 「ジェンダーとソーシャルネットワーク——旧炭産 (過疎) 地と大都市居住の70歳男女に関する実証的研究」 『平成5(1993)年度シニアプラン公募研究年報』(財)シニアプラン開発機構: 117-138.
- 副田義也 (編) (1978 a) 『現代のエスプリ: 老年』 No. 126, 至文堂。
- 副田義也 (1978 b) 「主体的な老年像を求めて」, 副田 (編) 『現代のエスプリ: 老年』 No. 126, 至文堂: 9-12.
- 須田木綿子 (1986) 「大都市における男子一人暮らし老人の Social Network に関する研究」 『社会老年学』 No. 24: 36-51.
- 杉井潤子・本村 汎 (1992) 「高齢者の主観的幸福感をめぐり一研究」 『家族社会学研究』 第4号: 53-66.
- 隅谷三喜男 (1984) 「日本の労使関係論の再構成——その全体像の構築のために」 『日本労働協会雑誌』 26巻4・5号。
- 玉野和志・前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang (1989) 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」 『社会老年学』 No. 30: 27-36.
- 玉野和志 (1990) 「団地居住老人の社会的ネットワーク」 『社会老年学』 No. 32: 29-39.
- タネン, D. (1992), 田丸美寿々 (訳) 『わかりあえない理由』講談社。
- 樽川典子 (1984) 「老年期の家族役割と夫婦関係」, 副田義也 (編) 『日本文化と老年世代』中央法規出版社: 149-193.
- タウンゼント, P. (1974), 山室周平 (訳) 『居宅老人の生活と親族網——戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版。
- Troll, L. and Turner, B.F. (1979). Sex Difference in Problems of Aging. in Gombert, E. and Franks, V. (eds.), *Gender and Disordered Behavior*. New York, Bruner/Maze: 124-156.
- 上千野鶴子・電通ネットワーク研究会 (1988) 『女縁が世の中を変える』日本経済新聞社。
- Vaux, A. (1985). Variations in Social Support Associated with Gender, Ethnicity and Age. *Journal of Social Issues*, Vol. 41, No. 1: 89-110.
- 渡辺 治 (1991) 「現代日本国家の特殊な構造」, 東京大学社会科学研究所 (編) 『現代日本社会・第1巻・課題と視角』東大出版会。
- 山田昌弘 (1992) 「福祉とジェンダー——その構造と意味」 『家族研究年報』 No. 17, 家族問題研究会: 2-14.

(関西大学助教授)

The Relationship between Support Networks and “Connectedness-oriented” Roles in Late-middle-aged Japanese Men :

From the Viewpoint of Gender Role

Reiko YAMATO
Kansai University

The purpose of the present study is to reveal the relationship between the support networks of late-middle-aged Japanese men, and the roles these men play in society.

Past researches have shown that men tend to rely exclusively on their spouses for support, while women tend to have large and multiple support networks, including their spouses, children, other family members and friends. These findings suggest that the reason women have rich support networks is that they are typically assigned “connectedness-oriented” roles, which put more value on making ties with a broad range of people than on being independent.

In our investigation we propose following hypothesis : that those who play “connectedness-oriented” roles will have more extensive support networks than those who don’t, regardless of whether they are men or women. This hypothesis is supported with data from a survey of Japanese men, aged 45-59. The sample results show convincingly that, as predicted, the more these subjects pursue “connectedness-oriented” roles, the higher the likelihood of their having large, multiple support networks.

Key-words : Support Networks, Gender Role, “Connectedness-oriented” Role